

ひとり暮らしのお年寄りを専用の情報端末を使って見守る取り組みが内子町で始まることになり、12日、住民を対象にした説明会が開かれました。

この取り組みは、ひとり暮らしのお年寄りを専用の情報端末を使って地域ぐるみで見守ろうと内子町商工会小田支所などが今月から始めます。

住民向けの説明会が12日開かれ、内子町商工会小田支所の児玉武志さんが「お年寄りと客足が遠のいている商店を結びつけると同時にお年寄りの健康を地域で見守りたい」と述べました。

この情報端末はボタンひとつで地域住民や家族に助けを求めたり、画面を触るだけで地元商店街の商品の配達を注文したりできます。

また、お年寄り1人に対して住民数人がついて手書きのメールなどでコミュニケーションをとることもでき、

地域住民がお年寄りの生活状況を見守ることができるようになっています。

お年寄りを見守る側となる62歳の男性は「お年寄りに気後れせず、ひとつの便利な道具だと思ってもらえるよう支えていきたい」と話していました。

情報端末のソフトウェアを開発した「情報環境デザイン研究所」の森やす子主席研究員は「情報端末を使った取り組みはいろいろあるが、地域の人が地域のお年寄りを支える仕組みがこの取り組みの特徴です。うまく運用できるよう期待しています」と話していました。

内子町商工会小田支所では、今週、地区のお年寄り23人にこの情報端末を配り、今月19日から取り組みを始めることにしています。